

檜 垣 良 夫

旅の目的は、さまざまであろう。現実からの脱出・逃避・解放を求めている旅もあれば、未知なるものへの好奇心に燃えてする旅もある。

そういう目的な旅に対して、無目的な旅ともいえる旅がある。「漂流」及び「漂着」の類である。予定的な旅に対して、予期せざる旅ともいえる。その類を「旅」と呼ぶことには、議論が分かれるだろう。が、旅以前の現実と一定期間接触できないことをもって、旅を定義することが許されれば、この類も旅ではある。

帰るべき現実を、帰るにしろ帰らぬにしろ確かに残している旅に対して、帰るべき現実があるにはあるのだが、無いに等しく見えるのがこの旅の特徴である。旅する者の意志は波と風に左右される。万一の憔悴にすがって願うのは、生き続けること、死なないでいることだけである。

死なずにすんだとの保証(?)を得た漂民が、次に願うのは何であるか。

突如突き放された現実へ、帰ることである。住心地の良かった現実であれば勿論、不幸が手ぐすねひいて待っている現実にでも、予期せざる旅に出された旅人は、一様に帰りがたがるであろう。それは、人間の、自然であるに違いない。

彼等の憧れる現実は、過去と呼び換え得るだろう。過去をひきずり、過去にひきずられて、人は生きる。完全に新しい、したがって無知の、不可解な現実を生きることは、罪に服すに似た気持を抱いて生きることになるのか。彼等漂民は、罪から逃れたがる如く、現実(過去)への帰還願望をつのらせる。その願望を、通例により「郷愁」と呼ぶことにして、「郷愁の眼」「郷愁の口」が捕えたものを軸に、二篇の漂流記を読み比べてみたい。

一つは、井伏鱒二氏の『漂民宇三郎』。一つは、井上靖氏の『おろしや国酔夢譚』。

『漂民宇三郎』は、昭和二十九年四月より昭和三十年十二月まで、二十一回にわたって『群像』に連載。昭和三十一年度、芸術院賞受賞作品。井伏氏の代表作品の一つである。連載終了後、講談社より単行本として刊行。その際、全体にわたって加筆訂正され、その後も、筑摩書房版『新選現代日本文学全集第一巻』への再録及び『井伏鱒二全集第六巻』(筑摩書房)への収録に際し、若干の字句訂正が行われたというが、米田清一氏的全集解題に拠れば、本稿における本文の引用は、講談社刊行の単行本(昭和三十一年四月三十日刊)に拠った。

『おろしや国酔夢譚』は、昭和四十一年一月号より四十二年十二

月号まで、二十四回にわたって『文芸春秋』に連載され、四十三年五月号に終章が発表されて完成。同年十月、文芸春秋社より一冊にまとめられた。四十九年、新潮社文学賞を改めた日本文学大賞の第一回受賞作品となり、これ又、井上氏の代表作の一つと言えよう。単行本化にあたり加筆した旨、あとがきに記してある。本文の引用は、その単行本に拠った。

現在に到るまでの漂流記の双璧と称して差し支えないと思うが、『漂流宇三郎』から十年余の後に、「おろしや国酔夢譚」が書かれていることには注意したい。先行作品としての『漂流宇三郎』が、井上氏の念頭に存したことは疑えないであろう。

二つの漂流記のあらましを述べるべきかとも思うが、省略する。長くなるし、要領を得ない整理ではかえって混乱を招くであろうし、本音を吐けば面倒である。

『漂流宇三郎』の主人公・宇三郎は、一介の庶民であって、彼の仲間も全員、気弱で、ずるく、素朴な庶民であるに對して、「おろしや国酔夢譚」の主人公・大黒屋光（幸）太夫は、日露交渉史にその名を留められている英知の持ち主であり、百科辞典や『広辞苑』の見出し語をつとめていることは指摘しておきたい。

宇三郎とその仲間は、全員、故郷恋しやの歌を斉唱するのに對して、大黒屋光太夫は、故国を憂うる心情の持ち主として、小さい故郷を捨てようと思志しさえする。が、光太夫を除いた十六人は、やはり故郷恋しやの歌手であること、宇三郎達と変わらない。

郷愁の眼―混血児を見る。

ハワイ、ウワへ島のヒロの港。宇三郎と別れた平四郎・次郎吉・金蔵の三人が、鞋を脱いでいた。そこへ、捕鯨船の船長ケツカルからの手紙―日本へ帰る便船がある―を信じた宇三郎が呼び寄せられ、三人の仲間と再会する。そして、日本人とカナカ人の女の間にできた混血児、年の頃十七、八歳のエモンと交渉を持つ。

四人の天保年中の日本人は、ごく自然に、エモンと親しんでいく。エモンは積極的におのが血を語り、ワタシヤ、ビゼンノ、オカヤマ、ソダチ、という、父親から聞きおぼえた歌を、間の抜けた拍子で、初対面で、歌ってみせる。四人の純血（？）日本人は、嫌悪の情を露わにせず、蔑視の眼を向けず、八日後の日曜日には、エモンの案内で町見物を楽しむのである。

愚生は昭和十六年生まれだが、幼少年時、「あいのこ」という言葉は、立派に生きて機能していた。進駐軍兵士に對する恨みだけを根にした機能のしかたではなかったと思う。周開に「あいのこ」は、いないのであり、周開にいない、したがって否応なく眼に立つ、白い（黒い）皮膚や青い眼、への嫌悪・軽蔑・違和感を、大人に教えられてではあるうが、子供達は子供達の共通感情として所有していた。

ウワへ島南側のプナルという港町に、日本人（混血児ではない）がいると聞いた宇三郎は、喜びもしたが胸騒ぎを覚えもしたのであって、日本人に逢ふのは恥かしいやうな気がした。Vと書いてある。

異国で同国人に会う喜びはわかるが、胸騒ぎとしい羞恥とは何であるか。先着漂流民に、漂流民ずれを予想して、おのが未来を重ね合せ

て恥ずるのであろうか。

混血児に特殊な感情を寄せなかった宇三郎のこの羞恥心は、日本人的な感情という曖昧さを持ち出さぬと理解が難しいか。

「おろしや困酔夢譚」中、やはり、二人の混血児が登場する。光太夫の一行が、イルクーツクへ入って一カ月たったある日である。△この時ほど、光太夫は驚いたことはなかった。▽と、混血児登場の場面は書き出される。遠因に、片言でも日本語を話す人間の存在を突見して△驚天動地の大事件▽とある。

宇三郎達は、誰も、一向に驚かない。予想外といった気振りを、微塵も見せない。

光太夫は、無言で二人の混血児の顔や動作を見守る。呆然自失、口がきけぬ状態にある。自分達以外の漂流者の存在を、悦ぶべきか、悲しむべきかに迷う。勇気づけになるのか、落胆材料になるのか、結論には時間がかゝると思う。△ただ何となく物悲しい気持が、自分の心の全面に立ちこめて来るのを▽光太夫は感じる。

二人の△奇妙な人物▽（傍点は引用者）から受けた打撃の大きさを、訳もない昂奮から、彼等が帰った後に漂流民達の体内を走った△△言い知れぬ悪感▽。

△奇妙な訪問者▽と一番多く言葉を交した小市は、ふいに、誰か塩をまげや、と言う。次に多く話をした磯吉が、すぐ塩を探してきて全員に振りかける。隣室で病のため寝ていて、直接的・間接的に接触の皆無であった庄蔵の△寝台▽にも振りかけに行く。

△彼等が居なくなると、不気味な、見るべからざるものを眼にしただあとの不快感が残った。当分拭うことのできそうもない、何とも

言えぬ厭な思いであった。▽と丁寧な心理解剖が、まだまだ続く。このような心理解剖を全く加えていない井伏氏と比べて、きわめて対照的である。

井上氏の、混血児を形容しての△奇妙な▽という語の二度にわたる使用が、気にかゝる。彼等の、どこが、何が、奇妙なのか。

日本人の顔をしていないこと、髪の色も、眼の色も、全くロシア人のそれであることが奇妙なのか。△幾ら自分達の父親は日本人であると言われても、おいそれとそれを信ずることはできなかった。▽と、混血への懷疑が記されている。混血の保証を捜し、求めて叶えられ難いが故に△奇妙な▽のか。答は、混血児との再会を待って、用意されているようである。

井伏氏は、混血児エモンの容貌・風采について、これは正に奇妙なことだが、一字をも費していない。

井上氏の場合驚きの大きさからくる自失感、途方に暮れた時に感じる物悲しさ、訳のわからぬ昂奮が過ぎた後の悪感、そこから生じる対象への禁忌感・不快感等は、天明年代の日本人の感情として、いや、対象の如何を問わぬ、人間感情の推移として、きわめて自然であるといえる。

その点、対混血児感情を、天保年中の日本人をして、一語も発せしめない井伏氏の態度は、不可解といえる。

光太夫に走った悪感、△悪感の質が他の連中の場合とは違っていた。▽とされる。混血児に、先着漂流民の運命を見て、帰国の可能性の薄れてゆくのを畏れているのである。

三日後、二人の混血児が、又やって来る。光太夫を除いて全員尻

込みをするが、やがて二人を取り囲んで、矢継ぎに質問する。彼等がいれば、何かを訊かずにおれない、と書いてある。満足できる答が得られない。二人が何となく逃げるようにV帰った後、進取の気性に富む磯吉は、混血児あひまというものは仕様のないもの、何となくはつきりしないという感想を述べる。妙に二人がおどおどしているのが気に食わねえ、とは頭がよくて芯の強い小市の感想。自分の父親のこともろくに知らないのだから、頭がどうかしている、訪問の目的が大体不明、とは女好きで頭の回転の早い新蔵。A奇妙さVの正体の説明であり、強調である。ひとり、鈍重で頑固な九右衛門のみが△一言でも、あいつらに、あいつらの喋りたいことを喋らせたかよ。来ると、いきなり、とっつかまえて、まるで訊問だVと仲問を責めて、混血児に同情を寄せる。

この場面でも、最初の驚きから幾分自由になった漂流民達の、混血児への関心・疑問・観察(裏返せば、自分達の将来への関心・疑問となる)が、多角的に、論理的に捕えられている。

井伏氏の筆は、エモンと宇三郎達との再会に際し、いきなり、△親父さまの遺品、みなさまに見せます。……略……Vというエモンの言葉を書きつけ、エモン持参の脇差から船頭平四郎の、船頭としての不心得を、思い返して責めるという、放縱な展開をみせて、エモンに質問の矢を浴びせるような場面を用意してはいないし、エモンに自分達の将来を見るといった弊りはない。

くどくなるのでやめるが、まだまだ混血児を軸にした場面で、井伏氏と井上氏は、対照的な執筆態度を見せている。が、次に、その原因らしきものを探ってみよう。

混血児との出会い方の相違が、問題か。
エモンは、通訳の役割りを背負って、現地人に連れられて宇三郎達の前に立った。

光太夫達の場合は、二人が、突然、片言の日本語を使って漂流民宿舎を訪ねてきた。(訪問の命令を受けたものと察することができる。)混血児の質の相違があるか。

片や、三月月前に死ぬまで、日本語しかしゃべらなかつた頑固な父親を持ち、したがって、流暢に日本語をこなし、備前岡山の俗語を口ずさみ、漂流民―純粹日本人―にしてから聞くが始めての「たんいせう」(「歎異抄」の初めを、少しではあるが暗誦している)に對し、一方は、日本語は片言、父については漁師であつたこと以外は知らず、日本語学校だの、政府からの補助金だのと△不気味なVことを詳しく説明できぬまま口にするのである。

しかし、いずれを取りあげても、描写を対照的に分ける程の原因には、なりにくいであろう。

混血児というものを、初めて、見たのである。「漂流民宇三郎」には、初見の文字が記していないが、越後早田村の漁師達にとつて、初見は、疑いを入れないはず。興味・関心・不審・懷疑は、光太夫の一行の如く、次々と湧くのが自然である。宇三郎達は、俗な好奇心すら示していないのであるから、井伏氏の筆への不審は、混血児との出会い方や、その質の相違からでは解きがたい。

井伏氏は、少し離れた村の、一人の少し毛色の変わった若い衆を描くような姿勢で、描いている。

漂流地の相違があるか。一方はハワイ、一方はロシア。温暖な気

候と、酷烈な自然では当然、人間の心情はその影響を受けるであろう。神経・感情の、鈍磨と過敏を導くか。

故国からの距離の遠さということも考えられるが、漂流にとつては、故国を海上遠く離れているという一点で、ハワイもロシアも同じであらう。

再び「漂流宇三郎」を見る。次の発言が気にかかる。エモンが言う。自分の父親は、備前の国児島の船乗りで、△「コジマチふところ」は、山が海に突きだしとります。きりりとした濱でござりませぬ。▽と。すると、すぐさま、次郎吉が続ける。△「おお、きりりとした濱。おいらの在所、越中の東岩瀬の濱も、きりりとした濱じゃぞい。▽」

混血児の一言から、次郎吉は、直線的に、郷里に思いを馳せている。光太夫流の、混血児の存在から、その父親の運命に思いを至しての恐怖・憂鬱からは、程遠い。次郎吉と光太夫の資質の差といえはそれまでであるが、次郎吉の明るさが気にかかる。異国にあつて混血児の父の故郷と、故郷比べ、故郷ほめをし合っているのであるから、滑稽ですらある。

井伏氏の、混血児を前に据えての、この不自然な明るさは、何を意味するのか。

井上氏は、その文学世界を、「蒼き狼」・「楼蘭」・「敦煌」・「おろしや国酔夢譚」と、北へ北へと広げている。一見、人種的な偏見や血の純粋云々とは自由でありそうに見える、井伏氏は、戦時中を除けば、実生活においても、文学世界においても、国外にさしたる興味を示していない。混血といった現象には、生理的な反発を発しそ

にみえる。

が、この両書を読んだ限りでは、井伏氏が混血児にやさしいのであり、井上氏が厳しいのである。不自然な寛容であり、自然な峻厳を、それぞれ、登場人物に与えているのである。両氏の、雅量とか視野の広狭とかで片付く問題ではあるまい。

思うに、井伏氏の、混血児と日本人の交渉を描いての不自然な明るさは、出会い方でもなく、当の混血児（及びその父親）の質にもよらず、漂着先とも無縁で、ひとえに、混血児の父親の故郷を、「備前国児島」に求めたからではないのか。

児島といえは、氏の故郷・福山に近い。

児島は、氏の「故郷園」に入るのである。

井伏文学は、故郷―郷愁―に触れると、甘くなる。郷愁の風穴をつぶすと、井伏文学は窒息するはずである。

△何でもないやうなこの山山／これがわが修業の邪魔をする／望郷の念といふを起させる／これではいけないと思ふのに／どうにもならないわが心▽とは、「山の園に寄せる」という詩の最終連である。（但し、全集集録時、改稿）

氏特有のはにかみを退けて、珍しく、心情の羽音を、なまな形で聞かせている。修業の邪魔をする「望郷の念」は、これを創造―想像―世界に取り込めば、修業の糧となること、明白すぎる事実である。

「山椒魚」から「黒い雨」まで、点としてあるいは線として、「故郷」が持ち込まれない作品は皆無である、と言っても過言ではない。混血児エモンは、氏の故郷に一筋つながるが故に、隣村の若者扱

いされてしまふのであり、次郎吉は、エモンと張り合つて、おのが村の自慢を、おとと切り出し、浜じやぞいと、揚々たる意気で結び得るのである。

井上氏の眼の厳しさは、混血児の存在の背後に、日本侵略というロシアの暗い意志を、漠然とではあるが予見しかけている光太夫の英智にその根を置いている。光太夫を除いた十六人は、宇三郎級の庶民だが、光太夫の智の枠の内、泳がされている。

井伏氏の小市民性、井上氏の国際性、と語を發展させられもするが、井伏氏は、混血児の存在に對し、單純に、血の交流の結果に過ぎぬと傍觀しているのかもしれない。父に似ぬ子程度の扱いで置かう、それを是としてゐるのかもしれない。

郷愁の口―何を使って食べるか

無事漂着あるいは救出された漂流民は、まず生き続けることを意志せずにはおれない。生きて故國へ帰りたい願いが、何よりも優先する。

生き続ける為には、食べて眠ることである。起きていることに疲れば、人は眠る。眠らせぬ病でもあれば別だが、不安や悲しみで眠れぬ夜を二、三日持ったとて、四、五日目には眠らざるを得ない。漂流民の心配は、したがって、眠ること・眠られぬことにはない。井上、井伏氏とも、生命を脅かすものとしての不眠を取りあげてはいいない。

が、食べることに、何を食べるか、については、当然、関心が払われる。

異国にあるのである。

食べたことがない、食べつけないものを食べざるを得ない。食物の選択は、許されない。両氏とも、食物の提供には十分意を配つてゐる。

が、何を使って食べるか、という点になると、両氏の関心の払い方は、これまた対照的である。食器というか、食具というべきか、要するに箸に相当するものへの関心を取りあげてみる。

「おろしや國酔夢譚」の方から見てみる。

八ヶ月の漂流後、一行はアムチトカ島へ漂着する。そこで最初の異人食を供される。地下に造られた穴蔵で入茶の如きものを与えられ、日が暮れると、得休の知れぬ白い汁と、一尺ほどの魚を塩むしにしたものが、戸板のような膳にのつて運ばれて来た。それを食べた頃V云々とある。

茶の如きものの味を味わう余裕は、なかったであろう。得休の知れぬ白い汁は、飲まねばならぬ。が、一尺ほどの魚は、何を使って食べたのか。

ナイフやフォークを使ったのではないことは、後に引用するところによつて、明らかとなる。

五本箸か、それとも「箸」を携帯したのか。手近の枝を折り取つて箸代りという方法もあるが、地下の穴蔵では無理である。いずれにせよ、箸又は箸に近いものを使えば、それに対する異人の反応が、当然予想される。

この時の食物については、しばらく後に説明される。茶の如きものは入海岸の石の上に生える草の葉を煎じたものVであり、得休の

知れぬ白い汁は、△黒百合の根を水で煮、搗きただらし、水でうすめたもの▽で、これをサラナと呼び、土民達は△木の鉢に入れ、木のさじで▽飲む、とある。食器具(?)についての最初の説明である。土民達は木さじを使うとあるが、漂流民もそれを使ったとは記していない。魚は、スタチキイと呼び、あいなめの類とあるが、それを何で食べたかについては、遂に説明されない。△三度三度汁と魚の塩むし▽であるのならば、魚を口に運ばせた道具が気にかゝる。一尺程の魚である。

光太夫達がフオークとナイフに、初めて接するのは、天明七年八月二十四日の夜である。△ニジネカムチャックに着いた夜、一同は長官の家でチャブチャブという魚を乾したものと、白酒のような汁にタラワという草の実を入れたものを御馳走になった。汁は鍋の鉢に入れられてあった。そして卓の上には熊手のようなものが置かれ、それに小刀と大さじが添えられてあった。箸の替りに使うものと思われたが、使い方が判らなかつた。光太夫たちは、これから長い間毎日使わなければならぬフオークとナイフに、この時初めて(傍点は引用者)お目にかかつたのであつた。▽

天明三年の七月、アムチトカ島漂着以来、丸四年間、彼等は、何を使って、三度三度の食事をしたためてきたのであろうか。△箸の替り▽とあるから、やはり、箸を、十七人がめいめいの箸を使ったのであろうか。

一連の疑問は、作品の終り近く、光太夫達の日本送還決定後、一応解かれる。ペテルブルグ出発を旬日後に控えた光太夫は、日本語辞典の誤りを正したり、日本地図を作製したりして△ネワ川の岸に

建てられてあるクンストカーメラに向向いて行つて、火箸、象牙の箸、椀、扇子、硯箱、鈴、そうしたこまごましたものを寄附した。いずれも日常使用していたもので、こんなものを寄附して何になるかと思うような品ばかりであつたが、ラックスマンの懲憑に従つてのことであつた。▽(傍点は引用者)

彼は、象牙の箸を、日常使用していたのである。しかして、先の引用にある通り、長い間毎日フオークとナイフを使わされてきたのである。

この矛盾は、いかに解くか。

公の席ではナイフとフオーク、仲間内での食事は箸、と説み取るべきか。ラックスマンの懲憑に従つて、とあるから、ラックスマンの眼前で、箸を使ったこともあるのだらう。ならば、好奇心・探求心の化物たるラックスマンによつて、箸がその餌食にならないという法はない。勿論、些細なこと故、特別に取り立てて「箸」の場面を用意するには及ばぬとも言えるが、落ち着かない。

光太夫は船頭である故、あるいは象牙の箸を所持・使用できたとしても、残る十六人も同じことができたのであろうか。

邱永漢氏は言う。△さて、玉杯とは杯の中で最も贅沢なものであり、(中略)同じように箸の中で最も贅沢なものは象牙の箸であり、象牙の箸を使うのは金殿玉楼の中と相場がきまつている。そこで美酒佳肴に明け暮れることを、中国語では「象牙玉杯」というのである。▽と「象牙の箸」(中公文庫)

天明年代の伊勢白子の浜の漁師風情が、象牙の箸を、一同携えていたとも思われぬ。光太夫は、故国へ持ち帰る品の荷造りをする。

△この国にあつて、故国にないものは、何でも持ち帰りたかつたが、自ら限度▽がある。衣類と靴の類は、貴重な風俗資料になるとの判断から各種の物を揃える。その外として、△糸巻き、匙、煙草入れ、小筥、ブラシ、銀鉢、茶瓶、皿、水指し、煙管、櫛、剃刀、鏡等々の日用品の類を一包みにし▽た。匙と銀鉢を入れて、フォークが入らない。故国にないものといへば、匙よりフォークだろう。光太夫は、既に象牙の箸を持たぬ。婦人の船中、何を使って食べるのか。

無事帰国後、根室で他界した小市の後家に小市の所持品が渡されたとあつて、その目録には△王面銀国王之印、島びろろど胴着、白しや胴着、(中略)さじ、襟巻、印判(中略)その他三十余点の品名▽が示されてあつたとするも、ここでもフォークの名がみえない。下らぬことをくどくどと、我ながら呆れてしまうが、何を食べるかということとは、何を使って食べるかということと同じ、という頑固な思いが消えない内は、しかたがない。

漂流民という特別の事情下に置いては、食器具抜きでは、食事が考えられない。

アダム・ラックスマンの一行が箱館湾に投錨する。日本側は、ロシア使節の主だつた者を招き饗応する。風呂に入らせ、山海の珍味を並べ、パンの替りに米飯が供された。献立は、『江戸旧事考』よりとして、一の膳から三の膳まで精細に紹介されているが、食器具については、触れられてない。

日本側は勿論箸を使ったのであろうが、ロシア使節一行は、何を使って食べたのであろうか。

慣れぬ箸を、一座の中に加えられている光太夫によって教えられ

つゝ使つたのであろうか。

ナイフ・フォークの可能性がない訳ではない。春山行夫氏の『食卓のフォークロア』(柴田書店)に拠れば、△西洋のスプーンがわが国で一般に知られるようになったのは江戸末期からで、蘭学家大槻盤水の談話を筆記した『蘭説弁惑』(一七八八)に「食盤三具」(食盤は食卓のこと)という見出しでスプーン、ナイフ、フォークの解説が出ているのなどは極く初期の記録だといえよう。▽とある。ラックスマンの饗応は一七九三年。江戸末期ではないが、△極く初期▽からは五年後である。

有体に白状すると、この饗応に使用された食器具について、非礼をも顧みず、井上氏に質問の書状をさしあげた。御返事はいただけなかつた。赤の他人の妙な質問故、当然は当然だが、お調べがつかなかつたのではないかとも思える。

とまれ、混血児をみつめた、直ぐで丁寧な服は、食器具に及んでいない。

井上氏は、漂流民の食事を、漂流民として取っていないようである。

「漂流民宇三郎」の場合はどうか。

漂流民一同、アメリカの捕鯨船に救われて、最初の食事を供される。△出された食事は、香味のある甘い酒のやうなものを一合入りのギヤマンの猪口に七分目、薄い茶碗のやうなものに入れて米の粥を半合ばかり、これには白砂糖のやうなものをかけて匙子一本あて添へてあつた。▽

最初の異人食及び食器を△やうなもの▽で説明して△匙子一本あ

てVと書き添えてあれば、これは、漂流の実感を伝えているであろう。

宇三郎が、先着漂流―井伏氏流に言えば、先輩の漂流―の団右衛門に無理矢理連れられて遊女屋へあがった場面で、ナイフ及びフォークが点描される。

△扉の外で、「ミステル・ダーエモン」といふ聲がして、いはゆる新造に當る女が、玻璃製の酒壺と鶏の丸焼きを持つて来て卓子臺の上に置いた。皿や湯呑や肉さしなどの食器類は、その女が吊棚の上からおろして来た。V

△宇三郎は（団右衛門から）因縁つけられるのが怖しさに、思ひきつてその強い酒を口にうつしこむと、豫定通りに嘔せ返つた。すると新造が鶏の丸焼きを小刀で切る手を止めて、何やらカナカ語で云ひながら宇三郎の背中をさすつた。V

漂流にとつては、あるいは異国を旅する者にとつては、見たことのない物に、名を与えることが、即ち生きること・生活することになるであろう。フォークを肉さしと呼ぶか、熊手のようなものと認めるか、議論の分かれるところであろう。どちらに分があるか。

フォークを肉さしと認めると同様な眼は、随所に見ることができ。担架は「戸板の代りに布でつくつた道具」であり、洋机は「脚長机」、ツボンのポケットは「股引の脇穴」「榮螺の殻のやうに廻つて降りる階段」とは何か、おわかりであろう。

といった調子で、井伏氏は、宇三郎達とともに漂流しているのである。「ウオッカの瓶徳利」に至つては、假想漂流を真底楽しんである風情がうかがえる。とまれ、混血児に対する自然と不自然と、

食器具に対する関心・配慮の濃厚と、二人の作家は、対照の妙を示している。

井上氏における混血児観は、食器具意識とおそらく表裏の關係にあるであろうし、井伏氏とて同様であろうが、これから先は難題である。

漂流民とは、郷愁という弾丸を、身体中を弾倉にして所有しているものの謂である。いつ、いかようにして、その引金を引かせるか、に作家としての興味は動くはずだし、読者の関心のひとつは向かう。が、それは、眼と口だけでは不十分で、耳・鼻・皮膚等の検証を経なければならぬ。次の機会に譲ることにして拙稿を終りたが、二人の作家の資質の一端の解明につながるのか、我ながら何ともおぼつかないものを感じている。

（山口県立防府西高等学校教諭）